

漢代明器泥象と生活様式

——長沙、広州、貴州の場合——

岡崎 敬

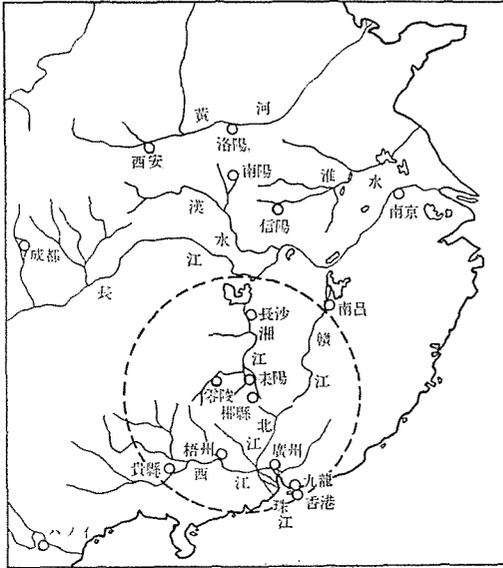
【要約】 この数年来、長沙、広州をはじめ華南における考古学的調査の進歩は、めざましいものがある。長沙、耒陽、広州、九龍、貴州の漢代墓葬とその出土品、ことに死後の生活にそなえた陶製の明器をふりかえつてみると、後漢代の明器の組合せにおいて、個々の形式が一致したものが多いの気がつくのである。明器の主なものに家屋、猪圈（豚ゴヤ）、倉、困（円い穀物ぐら）、井戸、灶（かまど）などがある。これらには華北の形式をおそいながら、高温多雨という華南の自然条件に適應した新しい生活様式がたっぷり出されていることがみとめられるのである。この地域に、秦始皇帝、前漢武帝、後漢の光武帝の時など、南征の師がおこされ、漢族の南下したことが、歴史上知られている。蛮族の中にありながら、漢族の鉄と農業の文化を浸透させていった姿をさまざまな明器のセットのなかにたどつていきたい。

一

京漢線より長江をこえ粵漢線をさらに南下すると中国自然の南北がよくわかる。一望千里コムギとワタの河南平野から信陽をすぎてしばらくすると、しだいに水田をまじえ、山には木を見出す。長江をわたり、屈原の身を投じたという汨羅をすぎると、湖南平野は一面の水田地帯で、龍骨

車で水をあげ、水たまりのそここにあひるがむらがつているのをのぞむであろう。湘江のほとりをはしつて湖南省第一の都市長沙につく。湘江をさかのぼり衡山を西にのぞみ、衡陽よりさらに南にむかうと広西省との分水嶺となる。やがて南流する北江にさしかかる。鐵路は北江にそつて南下、河には昔とかわらぬ木船が悠悠と下つている。広州にちかくなると、また一面の平野で、水中には水牛がむらがり、

第 1 図



田中の丘にはレイシンの林がみえる。四月われわれの北上したところにはいまだ熟していなかつたものが、五月のおわりともなるとさわやかな味の実をむすび、駅のほとりに籠にいられてうられている。広州は華南第一の都会で、四方の物産をあつめ、街も活気にあふれている。

長沙より広州の道はいまも華北と華南をむすび、また華

華南における漢代重要遺跡要図

南と江南をむすぶ重要な動脈であるが、かつて漢民族はこの道を南下し、中国南部を開拓した。秦始皇帝、前漢武帝の南征をはじめ、漢代に各地にコロニーをおいて、漢民族の文化をうえつけていつたのである。この過程については正史などには断片的に記されるにすぎないけれども、その不足を補つてあまりあるのは、近年における長沙、広州をはじめとする華南における考古学的調査の進歩である。ことに漢代より六朝にかけての墳墓の調査は十年前と全く面目を一新した。かつて長沙の戦国・漢代の遺物が海外に流出して世界の視聽をあつめた。しかし現在では、中国の学者によつて綿密に調査報告せられ、また各地における発掘があいついで、ほぼそのアウトラインをつかむ段階に達している。ここでは近年出土した長沙以南の漢墓出土品とくに明器泥象(陶製品)について紹介し、当時の華南漢民族の生活様式を展望することにしよう。

二

I 湖南省長沙〔長沙国(前漢)、長沙郡(後漢)〕

長沙は湘江の東岸にある都市であるが、その東郊、東北郊に戦国時代より漢代にかけての古墓があり、戦前その遺物が海外に流出した。そのあるものについては梅原末治、水野清一教授らによつて紹介されたが、^①ここが戦国代では楚の国に属することから、楚の文化内容の一端をあらわすものとして、注目されていたのである。

一九五一年ごろから長沙近郊の建設工事にともない、多くの古墓があらわれた。そのころ活動を開始した中国科学院考古研究所は早速その調査を行い、この結果は『長沙発掘報告』^②（一九五七年刊）として公けにされた。その後、同地より出土する遺跡については、湖南省文物管理委員会のスタッフによつて調査整理されている。出土品の多くは管理委員会に保存されている。われわれのおとずれた時、数室にわたつてぎつしりと遺物がつまれ、鏡も戦国、漢、唐にわたつて千面をこえるという有様である。整理されたものの、一部はちかくの湖南省博物館に展観されている。戦国期の墳墓についてはここにはふれないが、『長沙発掘報告』をはじめ比較的くわしい報告がある。土坑中に木槨をくみ、なかに木棺をおさめ、銅器、漆器などが多量に出土してい

る。しかし漢代ことに後漢墓については広州などにくらべてまとまつた報告が少いのは遺憾である。

『史記』のつたえるところでは高祖の五年、衡山王呉芮をうつつして長沙王とし、臨湘に都させた。呉芮はもともと番君で、項羽によつて衡山王に封ぜられ、郢（湖北荊州）にいたのである。十年十月には他の封建諸王とともに長安の長樂宮に來朝している。文帝の時、子なくして、廢されたが、景帝前二年（前一五五年）に、漢廷は庶子劉発を封じて長沙王とした。かれはこの年に領国におもむいている。この後王葬の時、断絶するまで劉氏の王系はつづいたのである。呉芮または劉氏の長沙王墓はいまのところ不明である。もつとも『水経注』六、湘水の項をみると、三国、呉の人が呉芮の塚をほり、その木をとつて、孫堅の廟をたてたというから呉芮の墓はのこつていないかも知れない。あばいた時には、かれの容貌や衣服は、もとのままのこつていたという。その木をとつたとあるから墓の構造は木槨であつたのであろう。

考古研究所のしらべた四〇一号墓^④は木槨で、なかから龜鈕の銀製印章がでた。方一・九センチ、「劉驕」の文字が

よまれる。おそらくこの墓の主人公であろう。この墓から「楊王家般」という銘のある漆器がでた。ところがこの墓から西南二〇メートルばかりはなれた墓から同一書体の「楊王家般」、「今長沙王后家般」という銘のある漆器がでていて、長沙王后墓ではないかと考えられている。こうしてみると劉驕も長沙王劉氏の一門で、その墓の規模からみて王族クラスのものと考えてよい。

北郊沙湖橋B二号墓(前漢墓)では青銅印に篆文で「劉当居印」(一面「劉長孫」とあるものがあつた。おなじく北郊の王家壠F四号墓(前漢墓)は土坑であるが、出土の青銅鏡に劉孝君銅□容□斗□升与蓋重八斤八兩

という銘がある。前漢代各地に帝廟がいと生まれ、その銘のある銅器が知られているので、参考になる。これらの劉氏も王族の名であるかも知れぬ。

前漢代の紀年銘を有する資料は必ずしも多くない。

(1) 漆器銘—湖南省文物管理委員会所見—

「楊子贛楮(紵) 具子不元康四年作」(前六二年)

(2) 二七〇号墓青銅釜銘

「時文仲銅釜一容二斗重六斤三兩、黃龍元年十月甲辰治」(前

考古研究所の発掘したものは、出土の遺物から西漢前期と後期の二期にわけられている。後期は武帝より王莽新代まで、前期はそれ以前である。戦国期との区分は問題があるが半兩の泥銭などを出しているものは一応秦漢の交にあてることができよう。前漢後期のものでは、先にのべた「長沙王后」「劉驕」「劉長孫」の墓がある。また、二〇三号墓は中室から出た漆杯の底に「賈」の字があり、賈姓の人の墓であつたことが想定される。また四〇五号墓から出たものに「熊子見印」(一面に「熊」信印)の青銅印章がある。熊はかつての楚の王系の姓にみえることは注意される。

前漢代のものは土坑中に木槨をくみ、中に木棺をおいたものが通制で、土坑の一方に階段をつけたものがある。いまだ塚室墳はあらわれていない。出土の遺物中、明器についてみると、戦国期では鍾、鼎、敦、爐、豆はこれを陶製化したものが少くないが、人物などは木製品でつくり、顔や衣服を彩色でかきわけている。前漢前期では、鍾、鼎、鈞、熏爐、鏡などの陶製品のほか鏡などには滑石製品がある。しかしまだ、器物家屋の陶製品はあらわれていない。

前漢後期になつて鍾鼎などの陶製品のほか、はじめて屋、倉、囷、井、灶（かまど）などの陶製品があらわれる。これは先にのべた前漢後期とみるべき四〇一号墓（木榔墓）の出土品によつて知られる。しかし第二〇三号墓^⑩にみるように人物や馬、車、船には木製品が多いし、また鍾鼎に滑石製品がある。いま前漢後期の明器を表示すると次のようになる。

陶製品

1 青銅器の形をうつしたもの

鼎、鍾、鈚、釜甌、博山炉、盃、

2 家屋器物をうつしたもの

屋、倉、囷、井、灶

滑石製品

1 青銅器の形をうつしたもの

鼎、鍾、扁壺、盆、炉

2 玉をうつしたもの

璧

木製品

人物俑、馬像、車、船の模型

後漢書郡国志をみると後漢代の長沙は王はおかれず、郡県がしかれて、中央より太守が派遣されることになつた。

後漢代に入つてはじめて塚室墳が盛行する。その多くは

三五四、三五五号墓にみるようにカマボコ型天井であるが、なかには沙湖橋A・M四一号墓^⑪のように穹窿状の天井をもち、数室をもつたものもみとめられる。出土品も前漢にくらべて一般に青銅器が少くなり、明器も鍾鼎などの陶製品の外に屋、倉、囷、井、灶、猪鬪、雞舎をはじめ、人物、豚、犬、雞などの陶製品が豊富にあらわれてくる。第二六二号墓^⑫では、屋、倉、灶、井が出土しているが、これと同一形式のセットは後述するように広州などにみるものである。月亮山より出たものもこの形式である。

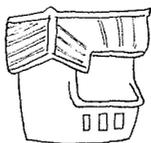
白泥塘の十八号塚室墓^⑬は「永和元年作」（西暦一三六年）

銘の塚、二十一号塚室墓には「永和元年造作」銘の塚があつた。前者では陶罐、豆、鼎、屋、犬が出たが、陶罐は開片青瓷で、その他のものには緑釉がかかつていた。後者は陶製容器の外、陶製の灶、つるべ、鉄鏟が出た。出土の陶器はみな緑釉がかかつていた。雨花亭の八号墓^⑭では屋、井、雞の陶製明器が出ているが、緑釉がかかつている。この点白泥塘の二墓は年代を示すいい基準となる。沙湖橋F一号墓^⑮は陶製明器として鼎、灶、猪鬪、倉、釜甌、つるべがあり、小形の銅車輪、銅銭などがでている。

陶製明器のセット



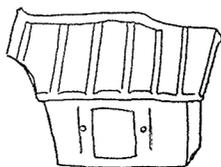
1



1



2



2



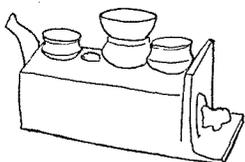
3



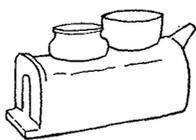
3



3



4



4

IV 広東省広州

1. 2. 皇帝岡42号墓
3. 龍生岡43号墓
4. 東山羊山横路

V 広西省貴州

1. 2. 3. 汝井嶺25号墓
3. 4. 新牛嶺4号墓

第二六二号墓や月亮山のもののは後漢の前半、白泥塘の二墓は後漢の後葉、沙湖橋F一号墓出土の灶は南京呉墓出土品と形式をひとしくし六朝初期にかかるものと想定される。

① 梅原末治、水野清一「伝長沙出土の漆画雙鶴雙蛇に就いて」『美術研究』七二号

梅原末治「伝長沙出土の木彫怪獣像」『宝雲』第二二号

水野清一「長沙出土の木偶に就いて」『東方学報』京都第八冊

梅原末治「湖南省長沙古墳の一括遺物について」『東洋史研究』

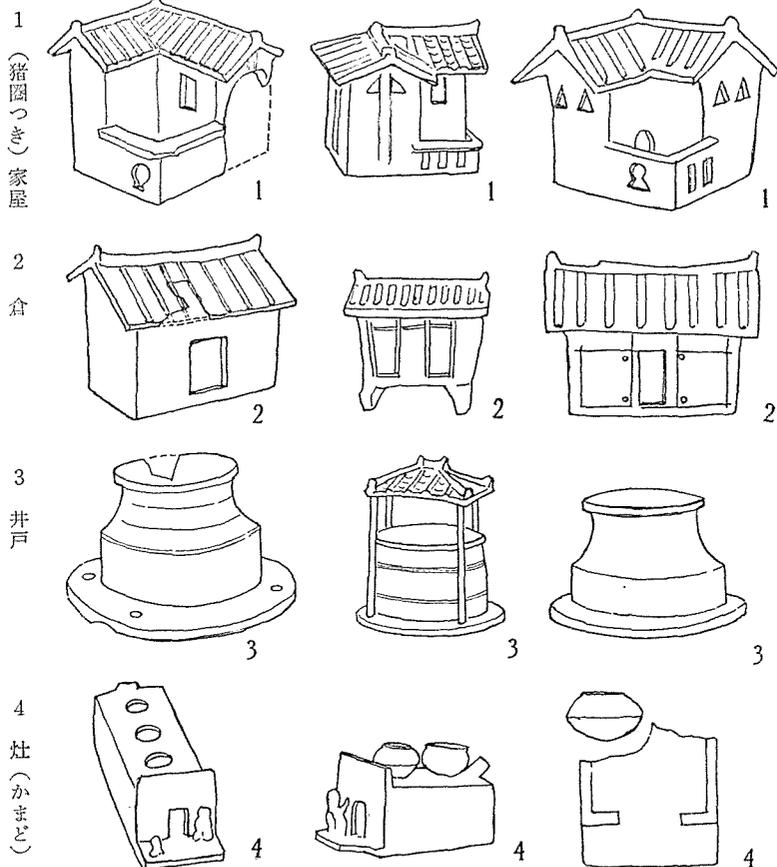
第六卷第二号) この論文は漢代の遺物にもふれている。

② 中国科学院考古研究所編「長沙発掘報告」(中国田野考古報告集、考古学専刊、丁種第二号) 一九五七年八月

この報告が出るまで、「科学通報」第三卷第七期や Chinese Reconstructs, 4, July-August 1952 にもあられた夏鼐氏の概報をまとめたものに、上田宏範「湖南省長沙における古墓の発掘」(『古文化』第一卷第二号)がある。

③ この時の模様は水野清一「長沙」(原田淑人編『中国考古学の旅』所収)参照。

第 2 図 華南漢墓よりてた



I 湖南省長沙
1—4. 262号墓

II 湖南省耒陽
1. 2. 4. 西郊1号墓
3. 来野營

III 香港市九龍
1. E8 2. R1 3. M6
4. M13, M3 (香港大学蔵)

- ④ 『長沙発掘報告』九五頁。
 ⑤ 『同上』九七頁。
 ⑥ 李正光、彭青野「長沙沙湖橋一帶古墓発掘報告」〔『考古学報』一九五七年第四期〕五四頁。
 ⑦ 『同上』五三頁。
 ⑧ 『長沙発掘報告』一一〇頁。
 ⑨ 『同上』九一頁。
 ⑩ 『同上』一一八頁。
 ⑪ 『同上』八八頁。
 ⑫ 李正光等「前掲報告」五八頁。
 ⑬ 『長沙発掘報告』一三三頁。
 ⑭ 周世榮「長沙白泥塘発現東漢塚墓」〔『考古通訊』一九五六年第三期〕五八頁。
 ⑮ 高至喜「長沙南郊雨花亭付近的東漢、六朝、唐墓」〔『考古通訊』一九五六年第六期〕六八頁。
 ⑯ 李正光等「前掲報告」六七頁。
 ⑰ 胡維高「記南京西善橋六朝古墓的清理」〔『文物參考資料』一九五四年第十一期〕七五頁。

Ⅱ 湖南省耒陽〔漢代の桂陽郡耒陽県〕

耒陽は湘江の上流、耒水西岸の一都市で、いまも粵漢線の一駅となつている。前漢高祖の時、湖南省東南部に桂陽郡がおかれた。耒陽の名は『前漢書』地理志にみえ、『後

漢書』郡国志に「耒陽に鉄あり」としるされている。『同書』循吏伝によると、光武帝の時、衛颯が桂陽太守となつた。耒陽県に鉄石が出るので他郡の人があつまつて来てひそかに鉄を鑄造する。ついには亡命者もやつて来て姦盜も多くなるというので、衛颯は鉄官をおこして私鑄をやめさせたところ一年の増収五百余万錢であつたという。

耒陽近郊の考古学的調査は湖南省文物管理委員会の手で行われた。県城の西郊の山丘の東に土坑堅穴墓があり、なかから青銅製帶鉤、劍、矛が出土した。報告者はこれを戦国時代にあてている。この山丘には後漢墓九基が出た。その三つは土坑堅穴墓、六つは塚室墓である。第一号墓はカマボコ型天井をもつ塚室墓で、「長宜子孫」鏡（龍虎花文ありという）、青銅鏃斗のほか、陶製明器として、鍾、鼎、簋、屋、井、灶などが出ている。青銅印章には陽文篆書で「田年」の字があり、田年墓とも称すべきである。

県の西南郊、耒花營にも後漢の塚室墓が出ている。その一号墓、五号墓、一五号墓の出土品も田年墓とほぼ等しい内容をもつている。県の南郊八キロ花石坳も山上にすくなからぬ古墓があるが、塚室墓より、陶甗、猪圈、雞舎が発

見されている。ここから出た銅銭には郭や文字のないものがあり、後漢末より三国の鼎立した混乱期のものと報告者は考えている。鏡の形式などからみてもおそらく後漢末期より下るものと考えられる。

① 湖南省文物管理委員会「耒陽西郊古墓清理簡報」(『文物參考資料』一九五六年第一期)三七頁。

② 『同上』三九・四〇頁。

③ 湖南省文物管理委員会「湖南耒陽東漢墓清理簡報」(『考古通訊』一九五六年第四期)二一頁。

④ 湖南省文物管理委員会「耒陽花石坳的漢魏墓葬」(『考古通訊』一九五六年第二期)六四頁。

Ⅱ 香港市九龍〔漢代の南海郡内〕

香港は一八四二年イギリスの直轄植民地となり、対岸の九龍は一八六〇年に清国より割譲され、深圳河以南の九龍半島は一八九八年に租借地となつた。すべてともと清朝の時は、広東省に属していた。漢代では南海郡の内にあることはいうまでもない。香港における考古学的調査は一九三二年以来在住していたフィン師(Rev. D. Finn)^①によることが多い。同師はランマ島で印文陶器、磨製石器を発見し

ている。一九五八年陳公哲氏の調査報告が公けにされたが、印文陶器や石器を出す遺跡から、中原の西周墓にみられる有釉陶豆が出ていた。また青銅戈も見出されていて印文陶器文化のなかに戦国以前の中原のものが波及していたことが察せられる。

九龍宋王台では近年、塚室墓が数基発見され香港大学のドレーク教授(Prof. T. S. Drake)らが調査した。いまだくわしい報告はないようであるが、出土品の一部は同大学の図書館でみることができた。このなかには鍾、鼎、盃、奩、簞などの陶製品のほかに陶屋(E. S. N7)、倉(R. 1. C1)、井(M. 6. C10)、かまど(M. 3. M13)がある。井はいま屋根をかき、かまどはいま破損してその底部と釜をのこすにすぎないが、屋、倉、井、灶の組合せといい、形式といい、つぎのべる広州後漢前期にみるものと全く一致している。

① 松本信広「香港船遊州の発掘に就いて」(『史学』第一七卷第一号)四九頁。

② 陳公哲「香港考古発掘」(『考古学報』一九五七年第四期)、図版三三。この種の灰釉豆は、長安普渡村、洛陽老城區、丹徒煙墩山をはじめ西周墓から銅器とともに出てくる。

IV 広東省広州〔漢代の南海郡番禺県〕

広州（広東）は珠江の三角洲の北端に位置し、四方の物資を集散するに好適の地をしめている。いままも広東省の首都であり、人口一二〇万をかぞえる。この地域の考古学的調査のはじまりは一九三一年、黃花考古古学院をおこした胡肇椿氏（現在、中山大学教授）らの努力に負うところが多い。同年に広州で刊行された「考古学雑誌」の創刊号には東山猫児岡の漢墓や大刀山晉墓の発掘報告をはじめ、一九一六年東山廟前亀岡で発見されたいはゆる南越王胡の墓の木刻文字の考証などをのせている。

一九五三年ごろから広州近郊にも建設工事がひきつづき、漢六朝をはじめとする多くの墳墓、遺跡が発見された。調査は主として広州市文物管理委員会の手によつて行われたが、出土品は委員会のあるもとの光孝寺（南越王趙佗の玄孫、趙建徳の故居という）や、越秀山にある広東省博物館に保管され、また中山大学考古学研究室にもみることができている。少し古い統計であるが一九五五年九月までに古代墓葬三四三、出土品総数一一二九〇件をかぞえ、その後もひきつづき遺跡が発見されているから、出土品もおびただしく、広

州のかつての富盛を察することができよう。

『史記』によると秦始皇帝が六国を平定し、さらに華南に兵をすすめて桂林、南海、象の三郡をおき、民をうつして従来の現地民と雜りすまわしめたという。この時、趙佗（河北真定の人）が南海郡の龍川（県）令となつたが、南海尉任囂の意をうけて番禺に進出し、秦のほろびるとともに、桂林、象郡をあわせ、自立して南越の武王と称した。前漢の高祖もこれを見とめ南越王に封じた。その後胡（文王）、嬰齊（明王）、興、建徳とかれの家系がつづいたが、武帝の元鼎五年（前一二二年）、漢は大軍を發して諸道より南越を攻め翌年番禺が陥落した。それより後、前、後漢を通じ、漢帝国の郡県にくりいれられたのである。『史記』貨殖列伝にすでに、「番禺もまたその一都會にして珠璣、犀、瑇瑁、果、布の湊なり」といつている。

広州附近から出土したという中国式の銅劍、銅矛（広東省博物館所見）は戦国末以来の中国青銅器の南伝をしめしている。西村から青銅製桶形容器が出ています。これはヴェトナム北部の青銅器文化⑤にみるものである。

前漢代の墓は一九五五年にすでに約六〇基調査されたと

いう。これをさらに前期と後期に二つにわかちつて、西村石頭岡、華僑新村、東山梅花村、北郊蛇頭岡のあるものはこれに属する。

華僑新村では土坑、堅穴木槨の二種があつた。その第五号墓では約一二〇枚の四銖四兩を出し、第七号墓の約八十八枚は秦半兩と漢八銖半兩の二種で、新村の古墓を通じて五銖銖を出さない。このため一応武帝以前のものとすることが可能である。この時期の陶器には表面のタタキ目など印文陶器の伝統をのこしている。出土の青銅印章には「臣奪」（うらに「梁奪」）、「臣之」（うらに「得之」）玉印に「李嘉」、メノウ印に「趙安」などの文字がみえる。一九一六年東山廟前亀岡で発見された木槨墓は武帝五銖銖を数枚出しているが、出土品からみてむしろ前漢前期のものを多くふくんでいる。

この時期の壺、鼎、釜、鑪壺などの銅器には必ずしも中原製作とはおもえないナイーブなものがある。素文鏡、蟠螭文鏡、四山羽状文鏡、四葉文鏡、玉環、玉璧、玉佩、玉魚や、矛、匕首、環頭刀子などの鉄製品も出土している。いまその明器をみると次の二つの材料からなる。

陶製品

鍾（壺）、鈔、壺、釜、甗、甗、甗

滑石製品

鼎、甗、方盤

前漢後期より後漢初期にかけてのものには東郊烏龍岡、東山馬棚岡、河南大元岡、東北郊横枝岡のものがある。前漢後期より後漢初期にわけては木槨墳のもつとも盛行した時期で、出土品だけで区分しがたいものがある。横枝岡一号墓、四号墓^⑤は木槨墳であるが、前者から陶製の井、灶、後者では滑石製の倉がでてゐる。出土の陶器のなかに長沙の前漢後期によくみる五聯罐があり、陶鈔もみられる。三聯盂などを伴つた皇帝岡一号墓（木槨墓）^④は屋、倉、井、猪船をはじめすべて木製品をもつてしている。この三墓などは一応前漢後期にあてることができよう。龍生岡四三号墓^⑦は五銖銖、大泉五十、方格規矩四神鏡などを出し、王莽新代を上らず、後漢も前期を下らぬものであろう。ここでは人物俑、犬、琴、船は木製であるが、屋、倉、井などは陶製品である。屋、倉、井の形式は皇帝岡一号墓の木製品と全く一致している。東山象欄岡二号墓では五銖^⑥（一〇三枚）、

大泉五十(二〇枚)、貨泉(四枚)を出した。俑ならびに豚は陶製、倉、井、灶の陶製品を出している。龍生岡四三号、東山象欄岡二号墓によつて代表される屋、倉、井、灶はこの外皇帝岡四二号墓、南石頭二号墓、南郊細岡四号墓などの木槨墓にも出土し、東山羊山の埴室墓から出たものもまたこの形式である。羊山のもののは前室の奥に三小室をおいたもので、屋、倉、困、井、灶、のほか牛、羊、雞、鴨などの小陶俑がでている。小蟹岡二八号墳は前室、後室とあり、後室に一棺をおいたものであろう。遺物は前室におかれ、陶倉、陶井、陶灶などがでているが、その形式また通制に従っている。ここから出た埴に

建初五年八月十一日造治此宜官秩

という銘がある。これは後漢章帝の代、西暦八〇年にあった。埴室墳の年代の一点をしめしているが、このころから次第に流行をみたものであろうと考えられる。

東郊の十九路軍墳場ちかくの一埴室墓は、墓室のプランは「廿」字形をなし、東西の二室にわかれ、それぞれ羨道をもつている。東西の二室は貫通して通れるようになっていゝ。出土の遺物は陶製品がもつとも多く釉をかけたものが

少くない。明器として報告者のいう陶城府、屋、倉、灶、几をはじめ陶矛、刀、戟、舞人、楽人の俑などにわたり、船や馬車も陶製となつている。また「万歳」銘瓦当や、五銖銭、半円方形帯神獸鏡が出てゐる。木槨墳出土の陶製明器に比べると非常に裝飾的で、時期も後漢の後葉以降に下るものであろう。

① 蔡寒瓊、談月色「発掘東山猫兒岡漢家報告」

胡肇椿「廣州市西郊大刀山晉塚発掘報告」

蔡守「広東古代木刻文字録存」

龜岡のものは木槨墓であつたとおもわれ、中から先漢式の槃、鼎、尊、罍、殺壁二枚、篆文の鏡四枚、秦の半両百余、呂后八銖八両百余、文帝四銖半両千余、武帝五銖数枚が出土した。譚鍾氏(広東の文廟)は元狩五年(前一八一年)以後歿したと推定される南越王胡か嬰斉のうち、後者は孫呉の黃武五年にあばかれたというから文王胡の墓と想定した。

② 廣州市文物管理委员会「三年来廣州市古墓葬の清理和発現」(『文物参考資料』一九五六年第五期)二一頁。

③ 梅原末治「安南清化省東山出土の桶形銅器」(『史林』第二八卷第四号)

④ 麦英豪「廣州華僑新村的西漢墓」(『考古学報』一九五八年第二期)三九頁。

⑤ 廣州市文物管理委员会「廣州市東北郊西漢木槨墓発掘簡報」

- 〔考古通訊〕一九五五年第四期）四〇頁。
- ⑥ 同会「広州皇帝岡西漢木槨墓發掘簡報」〔考古通訊〕一九五七年第四期）二二頁。
- ⑦ 同会「広州市龍生岡四三号東漢木槨墓」〔考古學報〕一九五七年第一期）一四一頁。
- ⑧ 同会「広州東山象欄岡第二号木槨墓清理簡報」〔文物參考資料〕一九五八年第四期）五七頁。
- ⑨ 同会「広州西村皇帝岡四二号東漢木槨墓發掘簡報」〔考古通訊〕一九五八年第八期）三七頁。
- ⑩ 同会「広州南郊南石頭西漢木槨墓清理簡報」〔文物參考資料〕一九五五年第八期）八五頁。
- ⑪ 同会「広州市文管会一九五五年清理古墓葬工作簡報」〔文物參考資料〕一九五七年第一期）七五頁。
- ⑫ 同会「広州東山東漢墓清理簡報」〔考古通訊〕一九五六年第四期）一二頁。
- ⑬ 同会「三年来広州市古墓葬の清理和發現」（前掲）二三頁。同墓のプランは三一頁にのせている。
- ⑭ 同会「広州市東郊東漢磚室墓清理紀略」〔文物參考資料〕一九五五年第六期）六一頁。
- ▽広西省貴県（漢代の鬱林郡内）
- 長沙、広州、九龍は幸いに地に足跡を印することができ、耒陽は車上いつのまにか通過してしまつたが、貴県はまづ

たく未見未踏の地である。地図でみると、広州より西、西江をさかのぼると梧州から先は広西省になる。河名も潯江、さらに鬱江とあらたまる。貴県は梧州（漢代の蒼梧郡）と南寧の中央、水陸交通の中樞にあたり、県境鉱産にとみ金銀銅鉄などみなそなわるといふ。広西省は秦代に桂林郡、漢武帝の時、その東に蒼梧郡、西南に鬱林郡がおかれたが、貴県は漢より蕭梁までの鬱林郡の郡治にあつたと考えられる。

貴県の考古学的調査は一九五四年ごろから広西省文物管理委員会の手ですすめられた。一九五五年五月まで、漢墓総数一二九が発見され、このうち西漢墓（^①「堅穴墓」）が二五、東漢墓一〇四、うち土坑（^②「堅穴」）墓九八、磚室墓六をかぞえる。遺跡は県城の北門駅の西南、劉吉嶺、西の汝井嶺をはじめ、北郊二華里の新牛嶺などに分布している。

新牛嶺三号墓（^③土坑墓）では陶鍾、陶鈞とともに滑石鼎、内行花文鏡がでてゐる。劉吉嶺（土坑墓）では陶壺、印、滑石製水盂、鏡が出た。前漢の後期、おそくとも後漢初期を下らぬものであらう。県城の西北五里、貴県中学の敷地から木槨墓（^④八号墓）が出た。銅壺、釜、博山炉、前漢五銖、

内行花文精白鏡とともに青銅鼓が出た。鼓身はすでに破砕しているが、鼓面は比較的完整で、直径四二・二センチをはかる。これはむしろ原住民の作品に属しよう。他の出土品からみて前漢後期、おそくとも後漢初期におくべきものである。

新牛嶺四号墓は土坑墓であるが、銅釜、銅奩、銅洗、帶鉤、鏡、刀、陶壺、鼎のほか陶井がでてゐる。汝井山嶺の土坑墓^⑥(番号五五、貴総二二六)からは鼎、壺、博嶺豆、勺、奩の陶製品のほか屋(倉)、井、灶、猪圈(屋)、が出てゐる。汝井嶺三六号墓^⑦は、はば十メートル、高さ二メートルの墳丘をもつ博室墓で甬道、中室、側室はすでにほられていたが、後室はそのままのこつていた。出土品には鏡一面(径八・五センチ「□三公主」の銘文ありという)、鉄鋤一個のほか陶灶、陶井亭頂、陶俑、陶雞、陶鴨がでたという。

一九五五年までに陶屋は二十六、猪圈十八、灶十、井三十五が発見されている。陶屋は下部に猪圈をおき、上に家をつくつたもので、猪圈というのは、前に家をおき、屋後豚の枠内に豚をおくものでその家屋構造は同一である。これらはいずれも広州後漢墓にみるものと全く形を一にして

いるのである。

① 広西省文物管理委员会「広西貴県漢墓の清理」(『考古学報』一九五七年第一期)一五五頁。

② 黄増慶「広西貴県新牛嶺第三号西漢墓葬」(『文物参考資料』一九五七年第二期)

③ 「広西貴県發現漢墓」(『考古通訊』一九五六年第三期)五七頁。

④ 黄増慶「広西貴県漢木槨墓清理簡報」(『考古通訊』一九五六年第四期)一八頁。

⑤ 黄増慶「広西貴県新牛嶺漢墓清理」(『考古通訊』一九五七年第二期)五八頁。

⑥ 梁友仁「広西貴県汝井嶺東漢墓の清理」(『考古通訊』一九五八年第二期)四七頁。

⑦ 「広西貴県清理了一批由兩漢至宋代的墓葬」(『文物参考資料』一九五六年第二期)七四頁。

三

長沙よりはじめて耒陽、九龍、広州、貴県の漢墓について紹介したが、今の区分でいえば湖南省、広東省、広西省に属し、漢代では長沙郡(國)、桂陽郡、南海郡、鬱林郡に相当する。

木槨墓と博室墓 長沙では戦国代にさかんに木槨墓が築

造せられた。これは前漢の前・後期を通じ行われている。樽室墓のあらわれるのは後漢に入つてからで、カマボコ形天井のものを通例とするが、後漢後半にはドームをもつた多室のものもあらわれている。

耒陽では銅劍、銅矛、帯鉤を出した土坑墓は戦国墓として報告されているが、前漢代の確例はいまだ発見されていない。後漢墓にも土坑墓がある。樽室墓は後漢に入つてあらわれ、カマボコ型天井である。

広州では秦以前の確例は明らかでない。前漢前期には土坑と竪穴木槨の二形式があり、これは前漢後期より後漢前期につづいている。樽室墓のあらわれるのは後漢に入つてからで、しだいに木槨墓にかわつたものと考えられる。貴州は前漢に土坑（竪穴）墓があり、中には木槨をもつていたことがみとめられる。後漢に入つてからは、土坑墓九八に對し、樽室墓六の比率を示している。

このように樽室墓は土坑墓、木槨墓に比しておそく、後漢代になつてあらわれたが、前二者はいづれも後漢代にも盛んに用いられていることは注意すべきであろう。

明器の材質 長沙では戦国代に銅器を摸した陶製品、人

物俑の木製品があらわれた。前漢ではこれがひきつがれ、銅器や鏡などの滑石製品が加わる。さらに前漢後期に入つて屋、困、井、灶の陶製品が出ることは確實である。後漢に入ると、陶製品が盛行し、人俑、動物もこれで行くられるようになる。

広州でも前漢前期では銅器を摸した陶製品、滑石製品がある。後期になると滑石製の倉があらわれ、屋、倉、井や船の木製品がある。また井、灶など陶製品があらわれる。後漢に入ると屋、倉、井、灶などすべて陶製品となるが、あるものは俑、動物、船などの木製品が伴出している。しかし次第に俑、動物なども陶製化し東郊十九路墳場のものもつとも装飾化したものである。

貴州では前漢墓に鍾、鈔の陶製品、鼎、水孟などの滑石製品がある。後漢に入つて屋、井、灶の陶製品があらわれ、また人俑や動物の陶製品が加わってくる。

耒陽、九龍では後漢代のものであるが鍾、鼎、奩などの陶製品のほか屋、倉、井、灶の陶製品をみる。

こうしてみると長沙、広州、貴州では前漢に銅器の陶製品を一樣にみる事ができる。長沙、広州では前漢後期に

屋、倉、井、灶の陶製品が出現した。長沙では人物俑などではいまだ木製品があり、広東では後漢初期にも行われている。しかし後漢前期には長沙、耒陽、広州、九龍、貴泉の各地で銅器の陶製品のほかに、屋、倉、井、灶などの陶製品が盛行し、しかもその組合せならびに個々の形式が全く一致していることは注意を要するところである。後漢後半になつてもひきつがれ、人物や動物などひろく陶製明器が行われるのである。長沙では前期に木船、木車が出る。広州では前漢前期より後漢初期にかけて木船があり、後漢後期に陶船、陶車が出ている。船の出土は華南の水運の地帯にふさわしいものがある。

四

これまで紹介したように、長沙をはじめ各地の漢墓ことに後漢墓からは鍾鼎のような銅器を摸した陶製明器のほかに家屋、倉、困、井、灶など当時のものをうつしたとみられる陶製品が多数存在しているのである。かかる方式はすでに前漢代、陝西、河南でおこなわれていて、これが南方の官僚・豪族にも採用されたものであろう。このなかで家

屋、困倉などは各地の自然環境によつて規定されるものであり、この点その遺構の発見されることの少ない今日、その明器は当時をものがたる重要な資料といわねばならぬ。ことに文献などにほとんど資料をかく当時の生活様式をこの上なくしめしてくれるのである。

いま(一)家屋、(二)猪圈、(三)倉、(四)困、(五)井、(六)灶(かまど)の順に各地の出土品を点検することにした。

① 中国における漢代における明器の研究上、ラウファー氏(B. Lauffer)の *Chinese Pottery of the Han Dynasty* (Leiden, 1908) は古典的な作品である。これは主として陝西省出土のものゝを資料としている。わが浜田耕作『支那古明器泥象図説』(一九三九年)は遼東、樂浪などの発掘成果をとりいれた名著である。最近でた佐藤雅彦『漢六朝の土偶』(陶器全集6、一九五八年)も日本にあるこの種資料をよくあつめてゐる。

(一) 家 屋

ふつう「屋」(陶屋)として報告されているものであるが、実際の出土例をみると、住宅、倉のほかに各種の特殊建築をふくみ、また猪圈を附属したものは屋もしくは猪圈の両方で報告されているので注意を要する。

長沙では二〇三号墓（前漢後期）に長方形のプランをもち、二つの入口をもつ陶製家屋が出ている。屋根には瓦をのせている。二六二号墓出土の「屋」^②と報告されたのはむしろ「倉」であろう。「猪圈」^③というのは方形の敷地にL字状に建物をおき右後を塀でかこんで中にブタをいれたものである。この形式のものは月亮山でも出土している。またかつてエール大学美術館で展観されたもので、「家の背後の庭に多教の家畜が居り、家の中では二人の下僕が殺物を搗いでいて、一人が戸口にたつている」というのはこれに属する。京都大学人文科学研究所には長沙出土とつたえるこの形式のものがある。ねずみ色の焼成でこれでは裏の庭に一つのブタがよこたわり、仔ブタに乳をふくませている。

この猪圈つき家屋ともいふべきものは耒陽、広州、九龍、貴県にも出土している。耒陽では西郊一号墓からでたものは、室内には二人の人物が手に盤などをもつているところがあらわされ、裏にはブタと仔ブタがいる。耒花營一号墓^④のものは「方屋」として報告されているが、裏に二頭のブタが、室内に人物がおかれている。九龍出土のものも長沙、耒陽のものと同巧である。

広州、貴県では猪圈つき家屋は長沙、耒陽などに似た形式のもの外に、下半部をすべて猪圈にして上に同じ構造の家屋をのせたものがあらわれる。

皇帝岡四二号墓から出たものは前者の形式、龍生岡四三号墓、南石頭二号墓は後者の形式に属する。皇帝岡四二号墓出土のものは、その室内に人物像がおかれている。報告者はいう。

屋内正間成一個横的長方形、中有兩備持杵舂米、小犬一只伏在備後、旁一備正在籩米、正門兩邊各有一備站立、側門旁亦有一備站立、均双手持布帛狀物、正間左后角有樓梯、上有門口通至廁房、一備手持帚狀物正在拾級而上、屋後右邊是一個方形小院、用欄干的矮牆圍着。一猪正在就食、一猪正從竇穴中出來。小院的左邊。上屬是廁房、下面与小院相通、内有一犬伏于地上、廁房的地台上開一個長方形穿洞、為澆溺之用。

この家の中には米をついたり、ふるつたりしてはたらく人々があり、その後方左は厠になり、右はブタ小屋になっている。龍生岡四三号墓、南石頭二号墓は、二層になり、下をすべてブタ小屋としているが、家屋の構造や厠の所在まで皇帝岡四二号墓のものと同一である。

貴県では前者は「猪園」(十八個)後者は「陶屋」(二十六個)として報告されている。

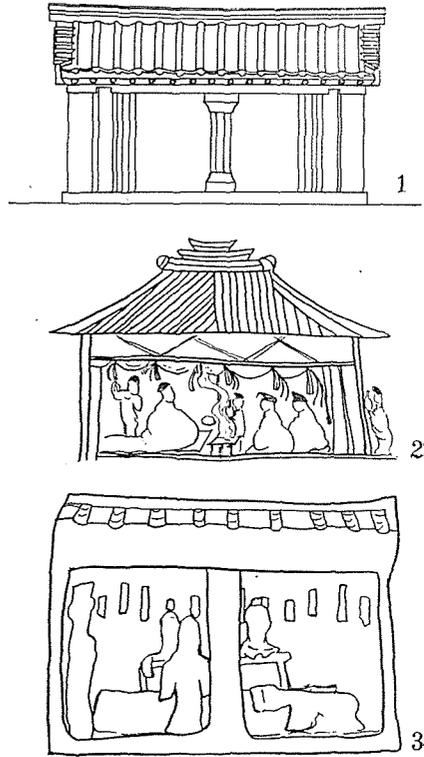
名称はことなつても広東、貴県出土品における両者の構造、他の遺物との共伴関係からみて、むしろ一層および二層式の猪園つき家屋とよぶのがふさわしい。この種の家屋は単なる家畜小屋にとどまらず、その中で作業する人々をあらわしている。おそらく当時のもつとも普通の住宅形式で広州、貴県の場合は土地湿潤のため高床にし、階下を家畜小屋にあてたとみるべきであろう。

右の比較的小形の陶屋とは別に、広州から大形の家屋が出ている。西村から出たものはおもてに二層の主家があり入口が二つつき、その一つの傍に犬がいる。うらは中庭となつて塀でかこんでいる。西郊のものもほぼ同一の構造で、入口は亜字形に一孔きりこんでいる。象欄岡二号墓から出たものは方形の敷地の中央に楼閣をもつた家屋があり、その左右に建物がつく。前庭と後庭の左右にはそれぞれ小房があり、前庭の前には門があり、後庭の後は塀でかこつたブタ小屋となつていて二匹のブタがいる。左側の小房は圓となり、上に人物がうづくまり、その下のあなには家畜が

通れるようになつてゐる。右側の小房は鳥小屋で雞と鴨がいる。また楼閣の左右の建物には三人の人物と長方形の白がある。二人は杵でついでおり、一人は両手に箕をもつてゐる。これは先にのべた陶屋をさらに複雑にしたものであつることが知られよう。おそらく主人公の住宅をあらわしたのであろう。

広州東郊十九路墳場の埴室墓には報告者のいう「陶屋」のなかに白をおき二人の人物が手に杵をもつてついでゐるものがある。「陶城府」と報告されたものに、まわりに高い塀をめぐらし、その前後に門があり、その上にそれぞれ望楼がある。四隅の上に小亭がある。なかに小房が左右兩列に、左に三、右に二、計五个ならんでゐる。すべて瓦葺である。その小房の前に甬十三個(もともと十六個あつた痕跡あり)がある。別に四甬は房内でひさまづいてゐる。大多数の甬は腰を弓のようにおつて、両手に圭の如きものをもつて、「恭肅的神態」を表現するといつてゐる。この「陶城府」とほぼ同一の外郭をもつものが、東山猫児岡の埴室より出ている。これは埴室の前面に一個独立しておかれていたもので、報告者は「陶宮」といつてゐる。これには中

第 3 図



祠堂と壁画・陶製明器にみる家屋と人物
 1. 山東省孝堂山石祠 2. 遼寧省遼陽石
 柳墓壁画 3. 広州東山猫兒岡出土陶屋

に二つの建物を前後にしている。前にあるもの（陶宮前座、第3図3）は中央に一柱のある屋をあらわし、中の台座の上に冠をうけた二人の坐像があり、その前にいる一人は、「むかい立ち、鞠躬として奏するが如し」といい、むかつて右には跪拝する人物が、左壁にちかく立つた人物がいる。また後の建物は二層であり、「楼上の右室に二人の婦人が同座し」、「楼下の婦人は高髻長裙」、「梯の上の一人は伏拝」と説明されている。前の建物は山東省孝堂山の石祠^①を想起せしめるばかりでなく、内部の構成は画像石の奥壁の図像

と一致している。遼陽漢墓にみる奥壁壁画にもかかる図像があることが想起されよう。これはむしろ山東の画像石や、遼陽の壁画のごときものが立体的に表現されたもので、そのおかれた位置からみても祠堂を陶製化したものと考えることができよう。

- ① 『長沙発掘報告』一〇一頁。
- ② 『同上』一三三頁。
- ③ 『同上』一三三頁。
- ④ 『全国基本建設工程中出土文物展覽図録』図版一八五。
- ⑤ 梅原未治「湖南省長沙古墳の一括遺物について」『前掲書』二六頁。
- ⑥ 大阪市立美術館編『中国明器泥象』（一九五四年）18。
- ⑦ 『文物参考資料』一九五六年第一期。
- ⑧ 『考古通訊』一九五六年第四期。
- ⑨ 香港大学図書館蔵。
- ⑩ 『考古通訊』一九五八年第八期。

⑪ 『考古学報』一九五七年第一期。

⑫ 『全国基本建設工程中出土文物展覽圖録』図版一九四、一九五。

⑬ 『同上』一九六。

⑭ 『文物參考資料』一九五八年第四期。

⑮ 『同上』一九五五年第六期。

⑯ 『同上』一九五五年第六期。

⑰ 蔡寒瓊、談月色「発掘東山猫児岡漢冢報告」(『考古学雑誌』創刊号)九九頁。

⑱ 関野貞「支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾」(『東京帝國大學工科大学紀要』附圖第四圖)

⑲ 駒井和愛「遼陽発見の漢代墳墓」(一九五〇年)

Wijma Fairbank & Masao Kitano; Han Mural Paintings in the Pei-yuan Tomb at Liao-yang, South Manchuria. *Artibus Asiae* Vol. XVII, p. 258. には石槨の構造と壁画の構成について論じている。

(二) 猪 圈 (ブタ小屋)

猪圈つき家屋についてはすでにのべたが、長沙五家嶺楊家山一号墓^①(一九五四年一月調査)から緑釉の陶製猪圈がでている。これは中央に方形のブタをいれるかこいがあり、その両側に厠があり、その前にそれぞれ階段がつく。厠お

よびブタ小屋の奥辺のみ瓦ぶきになつてゐる。長沙沙湖橋四一号墓^②(後漢)、および月亮山^③からでたものは円いかこいの側に厠をおいてゐる。かこいにはそれぞれ透しがある。南塘冲^④から出たものはやはりこの形式で、かこいは円く、中に一匹のブタがいる。沙湖橋FM一号墓^⑤のものはすかしのある円いかこいに一匹のブタがつく。これには厠はない。

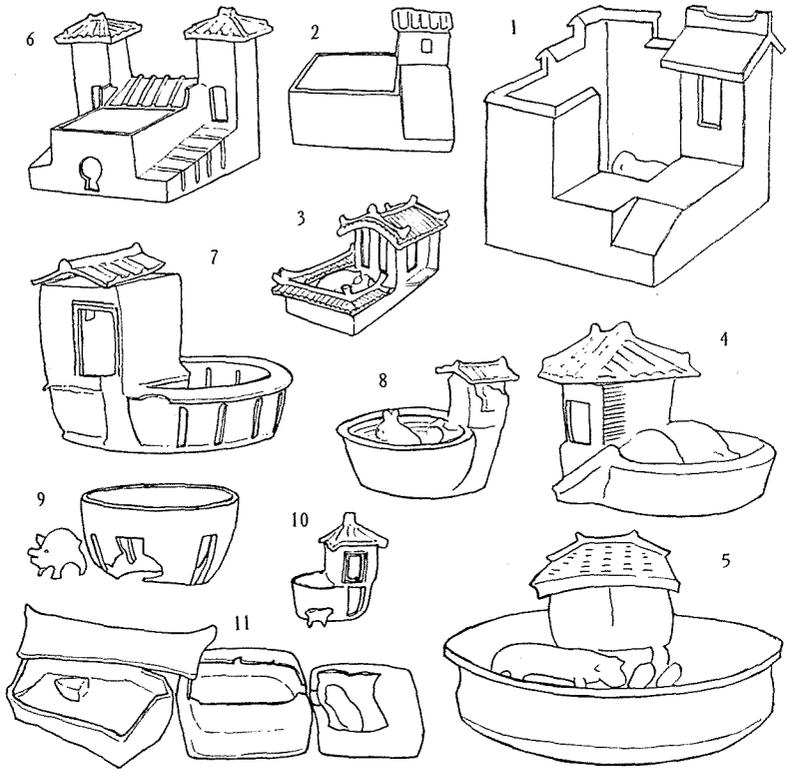
耒野營五号墓の猪圈^⑥は円形のかこいに厠がつく。かこいの中に小ブタおよび糟盆がある。うすく黄釉がかかつてゐる。花石坳^⑦から出たものは十三個。方形または長方形のかこいの中にブタを入れ、かこいの一部をおりまげ、またはその一方に覆いをつけてゐる。

広州、貴県ではいまのところ独立した猪圈は報告されていず、むしろ家屋と附属してゐる。

長沙楊家山一号墓のごとき猪圈は中国北部の漢墓に見出すことができる。河南省鄭州南関外^⑧や、河北省望都県東関^⑨の後漢墓より発見されたものをみると方形のかこいの横に厠をおいており、その形式の一致は否定することができない。長沙沙湖橋A14号墓、南塘冲の形式のものは南京における六朝初期の磚室墓に多くみるのである。耒陽耒野營

第 4 図 漢代の猪圈

五号墓のものはこの形をとつた委縮したものとみられよう。



つた。第四住居址では十四本、第五住居址では十一本、(は

- 1. 河北省皇都・東関
- 2. 河南省鄭州・南関外
- 3. 安徽省合肥
- 4. 江蘇省南京・西善橋
- 5. 湖北省武昌長春観（湖北省博物館所見）
- 6. 湖南省長沙・楊家公山1号墓
- 7. 同上・沙湖橋A41号墓
- 8. 同上・南塘冲
- 9. 同上・沙湖橋F号墓
- 10. 湖南省耒陽・耒野營5号墓
- 11. 同上・花石坳

ブタはいうまでもなく、中国人の生活にとつて、いまもむかしもきりはなすことのできぬ動物である。きわめて粗食にたえ、人間のたべのこしや排泄物をも処理してくれるので、厠に接してブタ小屋はたてられた。遼陽三道壕では前漢から後漢にかけての時期にあたる村落^⑩の遺構が発見されたが、方形の家畜小屋のあとに接して土溝がでてきた。その第三住居址では、十二本の木柱を方形にたて、一辺四メートル、中に家畜の糞や朽ちた草芥があ

ば六メートル)第六住居址では四本(はば二、〇五メートル)の柱孔がのこつておりこれとつらなる土溝は厠であろうという。

『前漢書』^{卷六} 燕刺王伝に

是時天雨虹下屋宮中、飲井水。井水泉竭。厠中涿羣出、壞大官
窀。

とみえ、顔師古はこれに注して

「師古曰、厠養豕園也。園音胡園反。」

といつてゐる。また『同書』^{卷九} 酷吏伝に、

鄧都河東大陽人也。以郎事文帝。景帝時為中郎將。敢直諫面折

大臣於朝。嘗從上林。賈姬在厠。野彘入厠。上目都不行。上欲

自持兵救賈姬。都伏上前曰亡一姬復一姬。進天下所少寧姬等邪。

陛下縱自輕奈奈廟太后何。上還。彘亦不傷賈姬。

というのも、中原における形式をよくしめしている。

一般に中国北部は雨も少く、又土地も乾燥しているため、猪圈は必ずしも屋根を必要とせず、むしろその一隅にひさしをつければ充分であつた。長沙楊家山のものはむしろ華北の形式をとり入れたものといつてよい。また沙湖橋のものは南京における六朝初期のものと同巧である。

華南では、かかる屋根なしのものでは、ブタも迷惑した

にちがいない。そのため建物の一隅に厠と猪圈をつけるか、広州、貴州のように、高床にして下をすべて猪圈としその上に建物と厠をおくに至つたものと考えられるのである。こうしておけば雨からも保護しうるのみならず、人間も文字通り「涿濁」をさけ得たのであろう。

① 「長沙漢墓中發現瓷質飾物」(『文物參考資料』一九五六一二、七頁。

② 『考古學報』一九五七年第四期、図版十一・七。

③ 『全國基本建設圖録』図版一八六。

④ 『考古通訊』一九五八年第三期、図版二。

⑤ 『同上』一九五七年第四期、図版十一・八。

⑥ 『同上』一九五六年第四期、二五頁。

⑦ 『考古通訊』一九五六年第二期、図版十八・五。

⑧ 劉東亜「鄭州南関外東漢墓的発掘」(『考古通訊』一九五八年第二期)図版六・二。

⑨ 『全國基本建設圖録』図版第一九。

⑩ 東北博物館「遼陽三道壕西漢村落遺址」(『考古學報』一九五七年第一期)一一九頁。

(三) 倉

「陶倉」として報告されたものは、「プランは長方形、

切妻の屋根をもち、瓦葺の建物をうつしたものである。通例中央に入口があり、その四辺に扉をつける孔のあることがある。長沙、耒陽、広州、九龍、貴陽などで他のものとくみあわさつて出ている。広州では、幸いに床柱をもつた全形を模したものがあつた。それは四本ないし六本の柱が下につき、高床になつてゐる。日本でいえば「高倉」である。

横枝岡四号墓^①の滑石製、四本の床柱がつき、中央入口、前に縁がついてゐる。皇帝岡一号墓^②のものは木製で前に手すりのついた縁（廊下）があり、右よりに扉がついてゐる。皇帝岡四二号墓^③の倉は陶製、その下に四本の竹柱がつく。入口の四方に四孔があり、前に縁がある。龍生岡四三号墓^④の倉は陶製、その底に円孔六個があり、木製の床柱をつける。いま六本残存してゐる。東山象欄岡二号墓^⑤も木柱六本のこつてゐる。大元岡四号墓では六本の陶柱がある^⑥。

東山羊山横路の磚墓^⑦から出たものはいま木柱を四本復原してゐる。前にすかし壁のある点、龍生岡四三号墓出土のものにちかひ。こうしてみると長沙、耒陽、九龍のものは現在床柱を欠くが、これがあるのが本当なのであろう。来

陽耒野宮五号墓の陶倉^⑧は四方に四脚をつけてゐるが、床柱をうつしたものであろう。かかる床柱をともなつた高床式倉の明器は湿気の多い華南において当然生れる形式である。同じ自然的環境にあるわが日本でも弥生式時代以降、高倉が採用されてゐた。ただ長沙、耒陽、広州をはじめすでに瓦葺となつてゐるところは、わが古墳時代の埴輪家にみるものとことなる。高倉の使用にあつてはおそらく階段がかけられたものと考えられる。

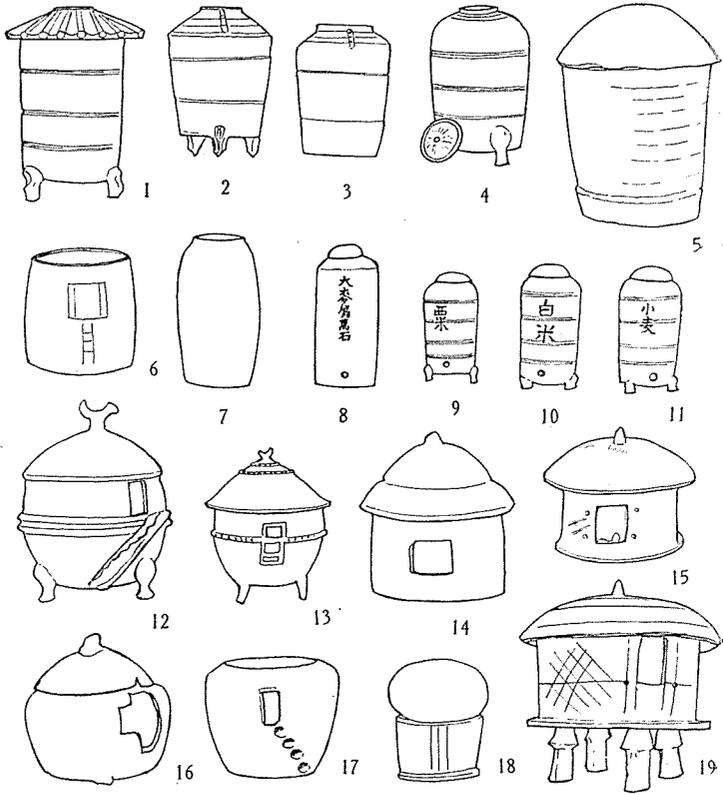
- ① 『考古通訊』一九五五年第四期、図版六六。
- ② 『同』上』一九五七年第四期、図版九二。
- ③ 『同』上』一九五八年第八期、図版三二。
- ④ 『考古学報』一九五七年第一期、図版二二。
- ⑤ 『同』上』一九五八年第四期、五八頁。
- ⑥ 『文物参考資料』一九五六年第五期、二四頁。
- ⑦ 『考古通訊』一九五六年第四期、図版七一。
- ⑧ 『同』上』一九五六年第四期、図版九六。

(四) 困（円形の穀物ぐら）

困^①は倉と熟して困倉とよばれるが、とくに円形のものをしてよんでゐる。

長沙二四四号、二六七号墓（前漢後期）から出たものは^②

第 5 図 漢 代 の 罎 (円形穀物グラ)



1. 陝西省西安・环城馬路5号墓 2.3. 同上・白鹿原
 4. 河南省滎沢県 5. 河北省景県(北魏) 6. 湖南省長沙244号墓
 7. 四川省成都・青杠包9号墓 8—11. 河南省洛陽・金谷園
 12. 湖南省長沙・月亮山 13. 江西省南昌 14. 湖北省武昌・長春観
 15. 湖南省・耒陽西郊1号墓 16. 湖南省長沙・南塘冲 17. 同上・雷家嘴
 18. 湖南省耒陽・花石坳 19. 広東省廣州・東山羊山横路

「陶倉」として報告されているが、罎にあたるであろう。前者は高さ一一、七センチ。円形で無蓋、長方形の窓口と

があり、おそらく円錐形の蓋(屋根)があるのが本来の姿であろう。

階段をかき出して
 いる。後者の階段
 のみあつて、窓口
 をかきわすれてい
 る。月亮山から出
 たものは三脚をつ
 けているが、窓口
 の下に階段を実際
 につくりつけてい
 て、なかなか堂々
 たる作品である。
 雷家嘴から出たも
 のは階段を凹みで
 あらわしている。
 これには蓋はない
 が、南塘冲⑥三号墓
 出土のものには蓋

素陽の素花管一号墓出土の陶製「円屋」^⑩と報告者はいつているが、困であろう。入口の四方に小孔があり、中に一人物がうづくまる。花石塼のものも円筒の上に蓋をのせている。

広州では東山羊山横路^⑤出土のものは、その上部は素陽素花管のものと同巧であるが、底部に四個の孔があり、これに陶柱四本がつけられている。柱の突起は「ねずみがえし」であろう。わが弥生式文化後期の山木遺跡^⑪（静岡岡田方郡韭山村）から木柱に「ねずみがえし」がはまつたままで見られたが、参考になる。広州の博物館には大元岡から出たものをみた。これは陶柱で「ねずみがえし」はみられない。

困の中に穀物を収めたことは三国志の呉志^⑫魯肅伝に周瑜為居巢長、将数百人故過候肅并求資糧。肅家有兩困、米各三千斛。肅乃指一困与周瑜。

とあることからあきらかである。

中国北部では土地が乾燥しており、雨も少ないために、土地の上に、また一部はこれをほりこんで困をつくること、が可能であつた。一九五五年行われた洛陽西郊の漢河南県城址の調査では前漢代より後漢にかけての円困がでてゐる。

三四〇a号円困（前漢代）は直径二・七五メートル、当時の地面を〇・五五メートルほりこんでゐる。地上の部分はこわれてわからぬ。後漢代の円困は六個、三四〇b号は土円困、他はすべて磚積みで、平均直径三メートルをはかる。磚積みのものは小さいもので〇・五二メートル、ふかいもので一・六メートル地下をほりくぼめ、まわりに磚をつむ。地上の部分はいまこわれて明らかでないが、困の底の中央に、柱礎となる石があり、これで天井をささえ、頂部は傘状をなしていたのではないかと想定されている。

陝西、河南の漢代の困の実際はさらに明器の陶製品でうかがうことができる。陝西省から出るものは円筒形の上部を壺の口のようにせばめたものと、瓦屋根をおいたものがある。後者は恒久的な施設をうつしたのであろう。中には三脚をもつたものもある。上に緑釉や褐釉をかけたものも、前漢末から後漢初期にはすでにあらわれている。河南省出土のものはくちをせばめた円筒状のものが多く、小さい円い蓋をその上にのせる。底にちかく小さい一円孔があり、三脚をもつものが多い。滎沢県の空磚墓^⑬（前漢末）にはすでにあらわれ、鄭州南関外や、孟県、陝西の後漢墓にも出土

する。近時洛陽の西郊、金谷園^⑩からでてきたものは、その外部に穀物などの名前を書き、実際に中に穀物を取めたものがあつた。たとえば文字中に

黍、大麦、小麦、白米、粟、稲米、大豆、小豆、麻、塩

などの名称をみる事ができる。洛陽金谷園のように文字はないが、漢六朝にわたつて円形の陶製明器は各地でつくられた。四川、江西、江蘇、福建、広東省をはじめ、ウェトナム北部 (Ho-chung, Quang-xiong)^⑪でも見出され、河北省景県^⑫で出土した北魏代のももこれに属する。漢族の住みつくところ、かかる円形が採用されたのであろう。

この実例は最近まで中国東北に見出すことが出来た。コムギ、コウリヤン、アワの貯蔵庫として土倉子(円倉子)とよぶ円形の泥塗りのくちらが一般の農家で用いられ、また規模な一時的貯蔵にあつては、地上に枕木をおき、その上にアンペラをしいて、その上に糧穀をおき、まわりをアンペラで円筒状にまき、上に傘状の屋根をつくる。これが恒久的な場合(糧院^⑬という)には粘土もしくは磚で同様のものをつくつてゐるのである。

長沙以南で漢代以前にかかる円形がなかつたという確証

はないが、漢族の南下とともに次第に南につたわつたとするのが妥当であらう。この際、地上に、もしくはその一部を地下にほりこむ北方の形式のままでは華南の如き多雨多湿のところでは採用されず、これを高床にするなり、階段を設けるなり種々の考慮がなされたに相違ない。これが広州になると倉とおなじく高床式になり床柱を附しているのである。こうなると床上に円形の形をのせるのは無意味ではあるが、そこはやはり伝統の力という外はない。

① 『齊民要術』一、種穀三に『礼記』月令の「孟秋之月、修宮垣垣牆、仲秋之月、可以築城郭、穿窬窖、修囷倉」という文をひいてゐる。元、王禎『農書』農器圖譜十、倉廩門に囷は「円倉也」といつてゐる。

- ② 『長沙発掘報告』一〇一頁
- ③ 『全国基本建設図録』図版一八六
- ④ 『考古通訊』一九五八年第二期、図版五二。
- ⑤ 『同上』一九五八年第三期、図版二四。
- ⑥ 『同上』一九五六年第四期、図版九二。
- ⑦ 『同上』一九五六年第二期、図版十二四。
- ⑧ 『同上』一九五六年第四期、図版七二。
- ⑨ 後藤守一「弥生時代の倉庫」(『駿台史学』第七号)六六・六七頁。

⑩ 黄展岳「一九五五年春洛陽漢河南東城東区発掘報告」(『考古

- 学報』一九五六年第四期）三三・三四頁。
- ⑪ 俞偉超「西安白鹿原墓群發掘報告」『考古学報』一九五六年第三期）四〇頁。
- ⑫ 陝西省文物管理委员会「西安环城馬路漢墓清理簡報」『考古通訊』一九五八年第七期）図版七。
- 蘇秉琦「關雞台溝東区墓葬」（一九四八年）
- 岡崎「陝西省關雞台の漢墓」（大阪市立美術館編『中國明器泥象』所収）にH一二号出土のものを紹介している。
- 西安十里舖ではこの両者が同時に出ている。
- 維忠如「西安十里舖東漢墓清理簡報」『考古通訊』一九五七年第四期）四二頁。
- ⑬ 梅原末治「河南鄭州及滎沢泉發見の漢代の墳墓と其の遺物」『東洋学報』第一九卷一号）
- ⑭ 『考古通訊』一九五八年第二期、図版六二。
- ⑮ 趙世綱「河南孟鼎漢墓の清理」『考古通訊』一九五八年第三期）四〇頁。
- ⑯ 黄河水庫考古工作队「一九五六年河南陝縣劉家渠漢唐墓葬發掘簡報」『考古通訊』一九五七年第四期）一一頁。
- ⑰ 黃士斌「洛陽金谷園村漢墓中出土有文字的陶器」『考古通訊』一九五八年第一期）三六頁。
- ⑱ Olov Jansé: *Archaeological Research in Indo-China.* (Harvard University, Press) 1947 Vol. I, Pl 126. 2 ↓ Hoà-Chung (Quang-xuong) A 出土のものさみなりとがである。
- ⑲ 張季「河北景県封氏墓群調査記」『考古通訊』一九五七年第

三期）図版十一。

⑳ 『滿州農業図誌』（一九四一年）をみよ。

(五) 井（井戸）

井は地下水をとるために地下にうがつた施設である。

長沙では二〇三号墓^①（前漢後期）から円筒状の陶製井戸がでている。上には井亭もしくは井架がない。二六五号墓では小形の壺がでているが、吊瓶つるべになるのであろう。二六二号墓^②（後漢）では円形の井戸の台に、四個のあながある。この上に木柱があり、屋根をうけるものであろう。井戸の上に井架をのせたものは南塘冲から円形猪圈とともに出土した。これには小形の壺形の吊瓶がついている。

乘陽西郊一号墓^③から出土したものは、長沙二六二号墓出土の如き井戸に、屋根をのせている。これも井戸の台に四孔があるから、四本の柱でささえたものである。乘花營一号墓^④、乘野營五号墓から出たものも同一形式である。

広州ではやはりこの形式で、四本の木柱が残っているものがそのままできた。龍生岡四三号墓の出土品はその典型的な例で、もともとの姿を想起することができよう。

広州の木槨および磚室墳出土の井戸はほとんどがこの形式にかぎられ、横枝岡一号墓、南石頭二号墓、東山象欄岡二号墓^①、南郊細岡四号墓^②の木槨墓、および東山羊山磚墓^③出土のもののみはこの例に属する。屋根は四注式、瓦ぶきで、この上に鳥形のかざりをおき、また井戸に鋸齒状の文様を刻んだものがある。

一 九龍の出土品は長沙二六二号墓のものと同じく、屋根を欠くが、全く同類である。

貴県でもこの形式のものは多く、一九五四年から五五年五月までの発見例でも三十五件をかぞえるという。汝井嶺二十六号土坑墓、三十六号磚墓^④出土のものも井亭をもつたこの形式である。

いま前漢末と推定される長沙出土品をみるに円筒形の井戸に壺形の吊瓶をつけた簡単な形式のものである。後漢代と推定される四柱で屋根をうける形式のものは長沙をはじめ、耒陽、広州、九龍、貴県を通ずる一般形式で、広州、貴県ではことに数多いことは注意すべきことである。井架をおき、滑車をもつた形式のものはいまのところ長沙では南塘沖にみるだけで、それ以南ではあまり行われなかつた

ものらしい。

近年中国各地の調査によつて、漢代の井戸が実際に発掘される機会ができた。また出土の明器や画像石^⑤、墓室内壁画^⑥によつて各地の井戸形式があきらかになつてきた。

河南洛陽澗浜^⑦から出た陶製のものは円形の井戸上に井架をくみ、滑車をおく。これに尖底のつぼを吊瓶としてつけるのである。この井戸は同じ洛陽出土のものと同くらべるとおそろしく背がたかい。これは上の節の部分が井戸でその下はその深さをあらわしたとみるべきであろう。ちかくの河南県城内で出た井戸^⑧は上部は円形、下部は長方形の断面を呈し、井戸口よりふかさ二・三メートルのところまで磚でつんでいる。井戸のふかさは正確にははかれなかつたが、八・二メートルまではつているから、すくなくも、それ以上のふかさにならう。

井戸の深さをも井戸にくわえて円筒状に表現することは、河南のみならず、甘肅^⑨、四川^⑩、遼寧遼陽^⑪、江西省^⑫などの漢墓出土品にこれを見るのである。

陝西、河南を中心とする華北の後漢代の井戸は井架に滑車をつけ、その上に滑車をのせている。井戸のなかには方

第 6 図 漢代の井戸



1. 四川省成都・譚家石橋
2. 河南省洛陽・洞浜
3. 河南省洛陽
4. 遼寧省牧城駅東（京大文学部蔵）
5. 甘肅省蘭州・七里河（甘肅省博物館所見）
6. 河南省鄭州・南関外
7. 陝西省内(?)（東大文学部蔵）
8. 朝鮮平壤・大同江面
9. 湖南省長沙・南塘冲
10. 同上・203, 265号墓
11. 江西省内
12. 浙江省杭州・古蕩鎮
13. ヱトナム北部・Nghi-vê, Bac-ninh.

形のものもあるが、ほとんどが円形の井筒で、その上部の井桁は円形、たまに文字通り井字形にこんでいる。いま井架および滑車のある井戸の明器の分布をみると河南、陝西を中心に甘肅、四川、河北^⑮、山東、安徽、北鮮(樂浪郡)^⑯をはじめ、中国北部に多く、長沙南塘沖はその南限といえる。これに対し井架、滑車を欠くものは安徽^⑰、浙江^⑱、江西にあり、湖南、広東、広西およびヴェトナム北部ではこれに井架をおいたものが出土するのである。

こうした井戸の形式は実際の遺構の調査によつてさらにくわしくたしかめられるであろうが、かかる形式の相違はやはり中国自然の南北に負うところが多いのであろう。

中国北部では一般に井戸が深く、滑車を用いなければ、十メートルをこえる深さではくむにも困難である。しかし南方では比較的あさいので必ずしもこれを必要とせず、むしろ雨をしのぐために屋根をおき、小亭の下に井戸をおいたのであろう。長沙は中国中部より南部の系列に属しながらも猪圈などにもみるように、北方形式のものも混在し、両地域の交錯したところとなつてゐることは注意すべきであらう。

① 『長沙発掘報告』一〇一頁。

② 『同上』一三四頁。

③ 『文物参考資料』一九五六年第一期。

④ 『考古通訊』一九五六年第四期。

⑤ 『考古学報』一九五七年第一期、図版二。

⑥ 『文物参考資料』一九五五年第八期。

⑦ 『同上』一九五八年第四期。

⑧ 『考古通訊』一九五六年第四期。

⑨ 『考古通訊』一九五八年第二期、四八頁。

⑩ 『文物参考資料』一九五六年第二期、七五頁。

⑪ たとえば山東省沂南の画像石にみえる。これは井架、滑車を有する。魯昭燭・蔣宝庚・黎忠義『沂南古画像石墓発掘報告』一九五六年、図版四九。

⑫ 遼寧遼陽石槨墓壁画にみるものは井架、滑車をもっている。李文信『遼陽発現の三座壁画古墓』(『文物参考資料』一九五五年第五期)三三頁、しかし別の墓より井架をかく形式の陶井がでてゐる。

⑬ 中国科学院考古研究所洛陽発掘隊『洛陽澗浜古文化遗址及漢墓』(『考古学報』一九五六年第一期)三四頁。

⑭ 『全国基本建設図録』図版第一五二。

⑮ 『考古学報』一九五六年第四期、二六頁。

⑯ 第六図にあげた蘭州七里河の井は筆者の陝西省博物館でみたものである。甘肅省武威皇官家坡三号墓からも陶井がでてゐる。ただしこれには井架はない。

甘肅省文物管理委員會「蘭新鐵路武威—永昌沿綫工地古墓清理概況」(『文物參考資料』一九五六年第六期) 四〇頁。

①⑦ 四川省文物管理委員會「成都東北郊西漢墓群發掘簡報」(『考古通訊』一九五六年第二期) 二〇頁。

①⑧ 駒井和愛「遼陽発見の漢代墳墓」ここでは甕を半截したものをつるべとしている。

①⑨ 『考古学報』一九五七年第一期。

②⑩ 『全国基本建設図録』図版第一九、河北望都東関出土。

②⑪ 安徽省博物館籌備処清理小組「合肥西郊烏龜墩古墓清理簡報」(『文物參考資料』一九五六年第二期) 四八頁。

②⑫ 岡野貞「楽浪郡時代の遺蹟」図版下冊

②⑬ 『全国基本建設図録』図版第一二一、安徽巢県出土。

②⑭ 馮信放「杭州西郊古蕩鎮東漢墓清理」(『考古通訊』一九五七年第五期) 七五頁。

②⑮ ウェトナム北部のものは井戸枠はあさい。これに井亭を架したものは、トンキン州のバクニン(Bac-ninh), ヲウ(Nghivé)に発見されてゐる。O. Jansé; *Ibid.* Vol. II, Pl. 15.

屋根を支える四柱は最近の復原である。

②⑯ 伊藤清司「漢の井戸—井壁の構築技術を中心に—」は技術の立場から整理した好論文である。

(六) 灶 (かまど)

灶は現在中国で「竈」の略字として用いられているので、

便宜上この字で記述をすすめる。

長沙では前漢後期とおもわれる二〇三号墓、四〇一号墓(木榔墓)からでてゐる。前者は長方形のかまどの一方に獸頭の煙突、一方にたき口をつけたもので、上に二孔をうがつ。大きい方には一釜一甕をおき、小さい方には一小釜をおいてゐる。焚口の上部にひさしがある。四〇一号のものもほぼ同巧で、ただこの方は焚口にひさしはない。

後漢代に入るとおもわれる二六二号墓出土のものは北京の中国科学院考古研究所でみることができた。これは長方形の灶の上に三孔があるが、上におかれた釜甕は失われている。たき口の底部に縁がのびていて、上に一人物(傭)がうづくまつてゐる。長沙の博物館にはやはり三孔の灶があるが、これは二つには釜甕を一つには釜をのせ、たき口には傭が火をたいてゐる。五家嶺楊家山のものも二孔、いま釜甕をかすが、やはり焚口に傭が立つてゐる。長方形で、焚口の前に縁がある式のものも長沙、耒陽、広州、貴県によくみる形式である。

長沙の博物館にある一例に、灶の奥に壁をあらわし、それにマナ板や鈎などをかけたものがある。二孔にそれぞれ

釜甌をおく。灶には緑釉をかけているが、中国北部にみるものと形式を一にしている。

沙湖橋F・M一号墓^①のものは断面がカマボコ状をなす点、南京附近の呉代の墓^②から出るものに近い。上は二孔、一孔に釜、一孔に釜甌をのせ、たき口も断面がカマボコ状である。この形式のものは湖南省文物管理委員会所蔵のものもあり、これでは煙突が前方にくちばしのようにのびている。これはプランおよび断面が長方形をなす形式のものにくらべて時代の下るものであろう。またこの形式にちかいかいもので越州窯^③の小形品が容園二五号墓より出ていて、六朝代に下るものと考えられる。

来陽西郊一号墓^④では長方形、二孔、それぞれ釜をのせる。焚口の前に一備と犬がいる。栲花營一号墓も長方形、二孔、それぞれ一釜一甌、一釜をのせ、たき口の前に一備がうすぐまり、前者とほぼ同巧である。九龍は完形品はないが、いま残存するものからみると、焚口の前に緑のあつたこと、釜のかかつていたことがわかるのである。

広州出土の陶製灶も長沙、耒陽と軌を一にしたものが多し。龍生岡四三号墓^⑤は、長方形、上の三孔にそれぞれ三釜

をおく。東山象欄岡^⑥二号墓のものは二孔、うえに一釜、一釜一甌をおく。これは左右に朱雀および玄武が陰刻されている。埴室墓出土のものでは東山羊山横路^⑦のものは直方形、四孔であるが、上に釜甌をおく。たき口の前に一備あり、腰をかがめて、内部をのぞき火でたく姿をとつている。小蟹岡二八号墓^⑧のものは長方形三孔。東郊十九路墳^⑨出土のものは前部の煙突部はくちばし状にのびている。上には三孔、それぞれ蓋つきの釜甌をおき、最後の釜の中に「一甲魚状物」があるという。灶の両脇にそれぞれ蓋つきの水がめがつく。灶の門外には右には犬、左には一備がある。灶内には柴薪があり、右辺の水がめの旁には一備が跪いている。左辺の水がめと灶の前のついたてにはねずみが一匹、食物をねらつている。これは前にのべた形式が非常に裝飾化されたもので、前方部がとがるという新しい特色をもつていることは注意されるのである。

貴県の汶井嶺^⑩(編号五五、貴総M〇二六)では長方形の灶の上に二釜がのり、その一つには甌をのせており、たき口に一備がいる。汶井嶺三六号墓では灶上に二釜あり、灶の外左側に一水かめあり、一人が舀水をする状をなしその対面

に犬がいる。また灶門上に虎がえがかれているという。貴州出土のものに断面カマボコ形の時代のやや下るとおもわれるものもふくんでいるが、一九五五年五月までに計七二件^⑩（前漢六件、東漢六十六件）をかぞえたといっている。

漢代陶製の灶は陝西、河南をはじめ、甘肅、四川、山東、遼寧、平壤附近、江蘇、浙江、をはじめ中国各地に分布し、その形式を伺うことができる。陝西省では長方形、馬蹄形のものがあり、上に磚文を型押しして、もともと磚できずいたものがあつたことがわかる。灶の形式についてはそれぞれ地方差があるが、その孔に釜をのせ、甑をおくいわゆる釜甑の組合せをとることは各地域を通ずる共通の特色であることを筆者はかつて指摘したことがあつた。漢代では釜が金属製品ことに鉄製品となるが、上の甑の部分は土器を通例とし、その底に孔をうがち、これを釜の上におく。そのため必然的に釜の口はせばまり、その底は円くならざるを得ない。先に漢代の灶について考えていたところは、いまだ中国本土における発掘例も少く、わずかに陝西省閩雞台溝東の漢墓の発掘例を資料としてあげたのであるが、近年の調査によつて次第にその例をまし、私共が中国の博

物館を見学した時も、多数の出土例を見つけることが出来た。また鉄釜そのものも出土例を加え、

陝西省西安市环城馬路九号墓（『考古通訊』一九五八年第七期）

” 宝雞李家崖十七号墓（『考古通訊』一九五五年第二期）

河南省洛陽市澗西（考古研究所洛陽分室所見）

四川省重慶・江北・相国寺（文物參考資料一九五五年第三期）

浙江省杭州市老和山（浙江省博物館所見）

” 義鳥（同 右）

などから出土している。いずれも鑄造品で、宝雞、洛陽、重慶江北では上に甑（土器）をおいて発見されている。これらはいずれも実用にたえうるもので、灶の明器とともにそのまま副葬せられたものと考えられる。

かかる鉄釜をもつたかまどの方式は次第に長沙より南方にも採用されたのであろう。貴州では鉄釜が五件（前漢一件後漢四件）でいて、後漢のものは前漢のものに比して器形が大きいという。その形式をみると口がせばまった先にのべた華北の出土例と全く一致している。近年四川省成都市近郊の前漢墓で両耳のついた銅釜がでた。これは上にさらに両耳のついた銅甑をおき、鉄製の三脚の上においたもの

もあつたらしい。かかる形式の銅釜は貴州省平壩、広西省貴州^⑮からもでていて、前者では鉄製四脚の上にのせている。成都ではこれと同形式の兩耳鉄製釜が出ている。長沙の容園^⑯では鉄製三脚と銅釜が、長沙・C・M九号墓^⑰は鉄製三脚の上に陶甗をのせた鉄釜をおいている。かかる鉄製三脚をもつたものを四川、湖南、貴州省にみることは興味がある。鉄製釜の普及の前に銅製釜がもちいられ、しだいに鉄製釜にかわる。ことに華北形式の鉄釜の南下とともに急激に鉄製品を採用したのであろう。長沙をはじめとする各地の灶の明器の上におかれた釜も口のせばまつた華北形式の鉄釜をうつしたものと考えられるのである。

六朝代に入ると長沙などでは南京などにみる形式のものがあり、また鍋形式のものがあつて、明らかに変化がみとめられる。しかし前漢後期より後漢代にかけて、灶に鑄造の鉄製釜を用いる漢代中原にみる炊さん方式が長沙をはじめとする拠点に急激に浸透していつたのであろう。

- ① 『長沙発掘報告』一〇〇頁。
- ② 『同上』一三三頁。
- ③ 『文物参考資料』一九五六年第二期、七四頁。

- ④ 『考古学報』一九五七年第四期。
- ⑤ たとえば南京西善橋塚^⑱は代表的な例である。ここでは「大泉五百」「大泉当千」銭がでていて、六朝初期のものともとめられる。胡繼高「記南京西善橋六朝古墓の清理」(『文物参考資料』一九五四年第十二期)七五頁。

⑥ 浙江省紹興出土のもので、先がとがり、釜甗をおき青釉をかけたものがある。長沙にもこの形のものがある。

蔣文怡、秦明之編「中国瓷器的發明」紹興出土古陶器研究」一九五六年、二一。

⑦ 周世榮「長沙容園兩漢六朝、隋唐、宋墓清理簡報」(『考古通訊』一九五八年第五期)一四頁。

⑧ 『文物参考資料』一九五六年第一期。

⑨ 『考古学報』一九五七年第一期。

⑩ 『文物参考資料』一九五八年第四期。

⑪ 『考古通訊』一九五六年第四期。

⑫ 『文物参考資料』一九五六年第五期。

⑬ 『文物参考資料』一九五五年第六期。

⑭ 『考古通訊』一九五八年第二期。

⑮ 『文物参考資料』一九五六年第二期。

⑯ 『考古学報』一九五七年第一期。

⑰ 岡崎「中国古代におけるかまどについて—釜甗形式より鍋形式への変遷を中心として—」(『東洋史研究』第十四卷一・二号)一〇三頁。

⑱ 『考古学報』一九五七年第一期。

①⑨ 四川省文物管理委員会「成都北郊洪家庖西漢墓清理簡報」

『考古通訊』一九五七年第二期） 図版二五

同会「成都東北郊西漢墓葬發掘簡報」『考古通訊』一九五八年第二期）二一頁。

②⑩ 『考古通訊』一九五七年第二期、図版十一

梁友仁「広西貴州発現漢墓一座」『考古通訊』一九五六年第四期）三九頁。

②① 『全国基本建設図録』図版一八四。

②② 『考古学報』一九五七年第四期、図版一二一〇。

五

これまでみてきたところを要約すると、少くも次のことはいえるであろう。

(1) 長沙、広州、貴州では前漢代に同様に滑石明器が採用されている。

(2) 長沙、広州では前漢後期の木槨墓に銅器を模したものほかに家屋、囷倉、井、灶などの陶製明器のセットが採用されている。これは中原における墓葬の副葬品のセットの規定をそのままではなかつたが、いちはやくとりいれたものであろう。

(3) 陶器もしくは陶製明器の製作にあたり、長沙、広州

などでは印文陶器の手法の伝統を否定しがたい。また長沙、広州の前漢墓では三聯、もしくは五聯罐という特色のあるものが共通して出ている。

(4) 長沙、耒陽、広州、貴州、九龍の後漢代の陶屋、倉、囷、井、灶はその個々の形式において、また組合せにおいて著しい一致がある。この一群を出した古墓に、広東では建初五年の紀年（西暦八〇年）のある磚墓があり、木槨ではそれ以前のものであると考えられるから、後漢前期にすでにそれをみとめることができよう。

(5) これらのセットのうち囷や灶のようにもともとその形式の起源は北方におくべきものがあるが、屋、倉、井などの形式は、中国南部、湿润地帯の環境に規定されたものであることは注意すべきである。

(6) 各地の家屋、倉、井亭にいたるまで、瓦をふき、丸瓦をのせている。漢代には漢族のすむところ瓦の普及したことがみとめられる。

(7) 広州では磚室墓の入口にあたかも祠堂を模したような陶屋をおいた例がある。これは墳墓の奥壁壁画にみるものと構図を等しくする。広州で中国北部にみるような祠堂

番号	出土遺跡	構造	明器の種類								備考	
			屋	倉	園	井	灶	猪園	俑	動物その他		
(I) 湖南省長沙												
1.	203号墓	木槨	○			○			●	●馬	●船車	◎扁壺, 璧
2.	244号墓	"	○	○								
3.	401号墓	"	○			○						◎鼎, 炉
4.	262号墓	"	○a	○		○	○					五銖, 銀印「劉驎」
5.	五家嶺楊家公山墓1	塚室	○			○	○			○犬		
6.	" 2	"				○	○	○				
(II) 湖南省耒陽												
1.	西郊1号墓	塚室	○a			○						五銖, 銅印「田年」
2.	耒花營1号墓	"	○a		○	○						五銖
3.	" 5号墓	"		○		○	○	○				五銖
4.	" 15号墓	"	○a	○	○	○	○	○				五銖 埋土中に鉄器
5.	花石坳		○		○	○	○					
(III) 香港市九龍												
(IV) 広東省広州												
1.	皇帝岡1号墓	木槨	●	●		●				●豚	●船	
2.	横枝岡4号墓	"		◎								◎鍾, 鈞, 鼎, 耳杯, 璧
3.	" 1号墓	"				○	○					
4.	皇帝岡42号墓	"	○a	○					●	●犬	●琴	漆耳杯
5.	龍生岡43号墓	"	○b	○		○	○		●	●犬	●船	五銖, 大泉五十
6.	南石頭2号墓	"	○b		○	○	○					五銖
7.	細岡4号墓	"	○			○	○					
8.	象欄岡2号墓	"	○	○		○	○		○	○豚	○鴨	◎方盆, 五銖, 大泉五十, 貨泉
9.	紅花岡29号墓	"	○	○		○	○		○	○羊	○牛	
10.	東山羊山横路	塚室	○	○	○	○	○			○羊	○鴨	五銖
11.	小蟹岡28号墓	"		○		○	○					建初5年(80A.D.)塚
12.	東郊19路軍墳場	"	○	○		○	○		○		○馬車	半円方形帶神獸鏡 青釉陶器
13.	猫児岡	"	○			○					○船	
(V) 広西省貴州												
1.	新牛嶺4号墓	土坑				○	○					
2.	汝井嶺(貴総)25号墓	土坑	○a	○		○	○					鉄刀
3.	" 36号墓	塚室				○	○		○	○馬	○鴨	鉄鋤

註 ○陶 ●木 ◎滑石製品 ○a ○b 猪園つき家屋(一層, 二層)

を祭つていたことも考えられる。

(8) 灶の形式は上に陶製の甑、鉄製の釜をのせるもので華北の形式をうけている。ことに鉄製釜の普及をみることでできよう。

(9) 以上のべたセットが各地に共通して出ること、それが一地でつくられて、各地に配給されたものか、また各地でそれぞれつくられたものか検討を要する。しかし陶製品製作は土器製作の技術につながり、漢代の銅器、鏡、漆器が高度の工芸品として、製作地が限られたのに対し、より一般的であり、それぞれの地域で製作された可能性はみとめてよいとおもわれる。

(10) 長沙は猪圈、井などにみるように北方的形式のものをまじえている。この点華北と華南をむすぶ中間地域である性格をまぬがれぬ。しかし長沙、耒陽、広州、九龍、貴州に共通する南方的な形式の存在は、漢代すくなくも後漢代の長沙、桂陽、南海、鬱林の各郡の官僚豪族の生活がちかいかいものであり、その土地に適應させた新しい生活様式がつくり出されていることをみとめないわけにはいかない。

六

戦国時代の漢族の舞台において長沙はまさにその南限であつた。楚や秦はここを通じて南海との交渉を行つたのであろう。秦の始皇帝はその三十三年（前二二四年）南下の師をすすめ、桂林、南海、象の三郡をおき、罪人をうつして越人と雜りすましめた。高帝の時、呉芮を封じて王国としたのも、かかる重要性をみとめていたと解される。広州では趙佗が独立して南越王をとなえたが、高后の時、有司が奏して南越に鉄器をうるのを禁じた。佗は「高帝の時は何物を通じたのに、いま高后は讒臣の言をきき、蛮夷を別異し、器物を隔絶した。おもうにこれ長沙王の計であろう。きつと中国に倚つて南越をほろぼして王となり自分の功とするのであろう」と、自ら南越の武帝となつて兵を發して長沙の辺邑を攻め、数県を破つて去つた。このため高后は將軍隆慮侯箠をつかわしたが、暑湿に会い士卒大いに疫み、兵は陽山嶺（広東省陽山県）をこえることができなかつたという。これは北方匈奴に対して行われた鉄の禁輸政策が南越にも行われたとみることができよう。

前漢代においても鉄官の分布は淮水以北の華北に集中し、楊子江流域では蜀に三個所、鄱陽湖より下流江北に四個所をかぞえるにすぎず、湖北、湖南以南はこれを見ることができない。鉄官の分布のみからは、南方には当時鉄を産しなかつたとはいえないが、鉄の大部分は華北から来り、長沙を通じて南へおくられたことは考えられる。

さて広州に本拠をおく南越はその繼嗣問題の紛糾から建徳の時、漢朝に叛いた。元鼎五年(前一二二年)武帝は大軍を發し、翌年番禺(広州)が陥落した。この時のもようは『史記』列伝五十三にくわしく記されているが、罪人および江淮以南の樓船十萬師がこれに従つたという。その径路は

(1) 路博徳(伏波將軍)

「桂陽(湖南省郴)を出て、匯水を下る」

(2) 楊僕(主爵都尉—樓船將軍)

「予章(江西省南昌)を出て横浦(江西省大庾縣)に下る。

(3) 故帛義侯(戈船下厲將軍)

「零陵を出て、離水(桂江)を下り、或いは蒼梧(広西省蒼梧縣)に至る。」

(4) 馳義侯(巴蜀罪人により、夜郎の兵を發す)牂柯江を下る」

この内(1)のコースは贛水を南下し、北江に出たもの。(2)のコースは湘水を下り、北江に出るもので、長沙、耒陽、桂陽、番禺の最短距離で、現在の粵漢線とほぼ一致している。(3)、(4)は越より降つた人々を用いており、ルートからいっても(1)(2)が主力にあたるのであろう。いずれも水路をとりすべて番禺にあつまるのである。南越の平定後、南海、蒼梧、鬱林、合浦、珠崖の六郡、ヴェトナム北部では交阯(トンキン・デルタ)、九真(タンホア付近)の二郡がおかれることになつた。これらの地域には北方の罪人はもとより江淮以南の樓船の師にしたがつた人々がすみつくことが多く、なにかにも、長沙、桂陽、零陵、予章の人々がことに多かつたことは容易に想像できるのである。武帝のエキスペディションはまず鉄製の武器に身をかためた漢族南下の大きな波といつてよい。広州は重要なターミナルとなり、象牙、犀角、たいまい、珠璣をはじめ南海の物産は直接ここを通じ漢帝國にながれこむことになつた。漢書地理志卷八に「往いて商賈する者、多く富をとる。番禺もその一都會なり」とのべている。

後漢は漢民族が南方の水田地帯を開発した時代である。

四川、江南はもとより再び華南にも目がそそがれた。

漢族は河川の流域や海岸の要地などにすみつき、土地を開拓したが、当然従来いた民族（現在の言葉でいえば少数民族）と利害の衝突した場合が少くなかった。九真郡にいた越族は後漢のはじめ漢族の支配に叛乱した。建武十八年（西暦四二年）光武帝は伏波將軍馬援をつかわし、長沙、零陵、桂陽、蒼梧の兵をもつて交阯をうつつている。馬援は合浦（広東省海康県）に出、海に縁つて進み、山に随つて道をひらくこと千余里、浪泊の戦で大いにこれをやぶつた。かれはすぎるところを郡県とし、城郭を治め、渠をひらいて、灌漑してその民を利すをつたえられている。

長沙^②のちかくでは後漢の初め武陵の蛮夷はとくにさかんで、建武二十三年（西暦四七年）には武威將軍劉向が南郡、長沙、武陵の兵万余人をもつて攻めて成功せず、二十五年には馬援らがかけて、やつとこれを降している。このほか湖南には零陽蛮、濮中蛮、長沙蛮などが後漢を通じて、漢族とたたかつたことがしるされている。いま湖南西部には少数民族として苗族がすんでいるが、今日の資料ではこれらの蛮族が何族にあたるか明らかでない。しかし次第に

漢族によつて山中においこまれ、一部は同化したことは考えられるのである。貴県木榔墓出土の銅鼓は漢族の製作というより、むしろ蛮族のものであろう。広西省中部の山地带にはいまも瑶族や僮族が多いが、貴県の開拓者はその郊外におそらく毎日顔をあわせていたにちがいない。馬援の時代とはほぼ近いのであるが、かれの場合おなじく獲得した銅鼓をとをく洛陽にもちさつたのである。

① 宮崎市定「支那の鉄について」『史林』第四〇巻六号）四四三頁。

② 岡崎「たいまいを通じてみた古代南海貿易」―渠浪より南海まで―（『京都市大学人文科学研究所創立二十五周年記念論文集』一七九頁）。

③ 長沙は六朝以降でも「長沙は下湿にして、丈夫多く夭折す。俗に鬼を信じ、淫祀を好み、葢を第して室をつくる。頗る越の風を雜う」（『湖南風土志』太平御覽一百七十一所収）とつたえている。

前漢、後漢のいくたびかの軍隊の移動と漢族の移住、郡県の設定と漢文化の侵透は、華南の共通の自然の上に、同一の生活様式をつくりだした。光武帝の時、桂陽太守衛颯が耒陽に鉄官をひらいたことは、華南開発の必要にこたえたものでもあつた。われわれのみた耒陽の漢墓もほぼその

時代にあてうるものであり、長沙、広州、九龍、貴州のもの
と同一の内容をもっていることも偶然ではないのである。

ここでは長沙をはじめとする華南各地の漢墓の出土品を
紹介しその比較のスケルツオをのべたが、これらの地は、
漢代の文献では、まさに辺境をかたる断片の言葉でかた

れるにすぎない。しかしその自然に適應する新しい生活様
式を確立し、その中に漢民族のもつ鉄と農業の文化を浸透
させつつある姿は、断片の言葉に耳をかたむけながらも二
千年をへて、いま再び陽光をあげた明器の姿の中にもくみ
とれるとおもうのである。(一九五九年一月)

貴誌(三九卷)第六号の「万葉集に見
える夜の船出」(一六八頁の埋草)を大
変興味深く拝見いたしました。
夜の船出と瀬戸内海特有の陸風海風と
を関連させたのは達見だと思えます。
私も葵田津の歌には、かねてから関心
を持っていましたので、K・N氏の御説
の蛇足となりますが、卓見を述べさせて
いただきます。

一九五六・一〇・三〇

岡田芳朗

万葉集卷一の「額田王」の歌、

「葵田津爾船乗世武登月待者潮毛可奈

比沼今者許芸乞菜」

の註、

「右檢山上憶良大夫類聚歌林曰。飛鳥
岡本宮御宇天皇元年己丑九年丁酉十二

月己巳朔壬午天皇太后幸于伊豫湯宮。

後岡本宮敷宇天皇七年辛酉春正月丁酉

朔壬寅御船而征始就于海路。庚戌御船

泊于伊豫葵田津石湯行宮。天皇御覽昔

日猶存之物當時忽起感愛之情。所以因

製歌詠為之哀傷也。即此歌者天皇御製

焉。但額田王歌者別有四首。」

いま、右の註から干支をもととして、

日付をもとめると、

飛鳥岡本宮天皇すなわち舒明天皇の九

年十二月壬午は、十四日で、グレゴリー

暦日では六三八年一月八日となる。

また、後岡本宮天皇すなわち斉明(舒

明后、皇極)天皇七年春正月庚戌は、同

じく十四日となり、西暦六六一年二月二

日にあたる。

舒明天皇九年の行幸啓の際に、夜間に

出帆したか、いなかについて明記されて

いないが、註の文脈から、どうも夜間に
出帆したようにとれる。

もし右の推想がゆるされるならば、い

ずれも月の一四日の夜の出来事である。

月齢十三乃至十四頃の、この地方の汐の

情況を見るといわゆる中潮から大潮にな

る時期で、満潮は午前八時―九時、午後

七時―八時頃で、干潮は午前十一―二時、

午後一時前後となつてゐる。したがつて

十四日夜は、月が高くなるにつれて、潮

が満ちて来る。

この地方の日没は、一月八日では午後

五時十五分頃、二月二十一日では午後五

時五十六分頃となる。したがつて日没後満

潮まで二時間乃至三時間、月が雨天に近

づくのを望みつつ潮を待つわけで、「船

乗世武登月待者潮毛可奈比沼」という言

葉に実感がともなつて来る。

The Historiography of the American Revolution

by

Akira Imazu

What were the main causes of the American Revolution which resulted in the liberalist-movements in the 19th century together with the French Revolution ? ; and what functional relation was there between the movenents for home-rule and independence of the Thirteen Colonies, and the socio-political tension within the Colonies ? ; these are still old and new basic problems in the study of the Revolution. This is the reason why Professor E. S. Morgan of Yale University says to-day such as following, while two generations more have passed since the publication of the objective writings by so-called "Imperial School of the Colonial Period": "We must not expand particular insights into a complete explanation. We must continue to ask, for we still do not fully know, what the Revolution was". In this paper the writer, tracing briefly the process how the history of the Revolution has been written from the very beginning of the Republic, will examine chiefly those two basic problems, and will have a perspective for the present in studying the Revolution.

Ming-ch'i (明器) *Ni-hsiang* (泥象) in the *Han* (漢)

Dynasty and its Mode of Life

—cases in *Ch'ang-sha* (長沙), *Kuang-chou* (廣州),
and *Kuei-hsien* (貴縣)—

by

Takashi Okazaki

For these years archaeological investigations in the southern China, including *Ch'ang-sha* (長沙) and *Kuang-chou* (廣州), have made a rapid progress. To look back upon burials and finds of the *Han* (漢) era in *Ch'ang-sha* (長沙), *Lai-yang* (來陽), *Kuang-chou* (廣州), *Chiu-lung* (九龍), and *Kuei-hsien* (貴縣), especially earthen *ming-ch'i* (明

器) which were ready for the life beyond the grave, makes us aware of their identification with many earthen *ming-ch'i* in the Later-han(後漢)dynasty in their combination and individual style. Principal *ming-ch'i* were *wu* (屋), *chu-chüan* (猪圈), *ts'ang* (倉), *chün* (困), *ching* (井), and *tsao* (灶), which show to have created a new mode of life fit for natural conditions of rain and moisture in the southern China after the style in the northern. It is well-known in history that expeditions were made there in the periods of Emperor *Shih-huang of ch'in*(秦始皇帝), Emperor *Wu* of the Former *Han* (前漢武帝), and Emperor *Kuang Wu* of the Later *Han* (後漢光武帝) and the Chinese people advanced southward. Then we want to trace the figure of the Chinese people who penetrated the civilization of iron and agriculture into the surrounding barbarians.

The Local Government Office and the *Fugō* (富豪)

Class in Early *Heian* Period(平安)

by

Yoshimi Toda

The leading factor of the potential powers which converted *Japanese Codal System* (律令制) in the ninth and tenth century was the social class called "*Fugō*" or the rich at that time. They were even in the *Rōnin* (浪人) or the vagabonds, a death-wound for the *Codal System*, taking an active part in *Kōryō* (公領) or the State-owned territory as well as manors after the end of the ninth century. To reorganize these rich vagabonds with inhabitants, each *Kokuga* (国衙) or local government office established "*Kokurei*" (国例) or the customary laws for single county in the second half of the ninth century, which were the fundamental amendment of the *Code* on the status of the ruled, tax-collection law, penal regulation, and so on. On the other hand, the *Fugō* who accumulated a lot of rice as their property kept land under direct management and practiced usury through the investment of the property, on the basis of which they became tax-paying contractors, where there was one of the origins of *Myō* (名). Their